

この先の福祉交通について考えるシンポジウム2019年11月27日

# 外に出る/家でくつろぐ ‘2018ケイパビリティ調査’が写した国立

～より質の高い外出・在宅を実現するために  
求められるかたち～

後藤玲子（一橋大学経済研究所）

神林 龍（一橋大学経済研究所）

## ケイパビリティ（潜在能力）

- 外に出る（風、流れ、開く）／  
家でくつろぐ（囲み、なじみ、保つ）  
～それぞれのよさ、それぞれから広がるよさ～
- いつでも外に出ようと思えば出られる。だから、  
今日は家でくつろごう！
- いつでも家でくつろごうと思えばくつろげる。だ  
から、今日は外に出よう！

- ・外に出る／家でくつろぐ、どちらも十分に選択できるうえで、自由な選択を妨げられないこと = ケイパビリティ（潜在能力）
- ・でも、はたして、どちらも十分に選択できる、といえるのだろうか？
  - ・「歩くことは、命がけ」（単独歩行ができる視覚障害者）
  - ・「家族は働きに出るので、その間は家から出ることができない」（車椅子利用者）
  - ・「バリアフリーが心配で旅行できない。電話をたらい回しにされた」（人工透析で通院中）

外に出る／家でくつろぐ  
【どの人にも選択肢を十分に保障することは】



社会の責任

どちらも気がねなく選べるようにしたうえで、  
さあ、お選びください！と言えるように、

(表) 個人の外出を支えるしくみをどうつくるか。

(裏) 個人の在宅を支えるしくみをどうつくるか。

(表裏一体：双対性問題)

# 『国立市高齢者・しょうがいしゃの外出に関する調査』 2018年度結果報告

小林秀行 (慶應義塾大学PD)

神林 龍 (一橋大学経済研究所)

後藤玲子 (一橋大学経済研究所)

食をとおして健康を考える

費用  
無料

## 介護予防・健康づくり講演会 「食べることは生きること ～今考えたい高齢者の食～」開催

手話通訳  
付き

元気でいつまでもいきいきと暮らすためには、食に関する興味を持ち続けることが大切です。味覚やかむ力が変化する高齢者の食について、NHKテレビ「きょうの健康」にも出演経験のある講師の方からお話を伺います。

当日、東京多摩青果株式会社の協賛により、参加された皆さまに青森県産のりんごを配布します。

多くの市民の方にご参加いただきたく、ぜひ、貴媒体での告知および取材・掲載方、お願いいたします。

**講演会特典**当日、東京多摩青果株式会社の協賛により、参加された皆さまに青森県産のりんごを配布します。

### 記

1. 日 時 2月5日(火)午後2時～3時30分(開場：1時30分)
2. 場 所 くにたち市民芸術小ホール(国立市富士見台2-48-1)

『国立市  
高齢者・しょうがいしゃの外出に関する調査』

- 「2019年2月5日」の外出についてアンケート調査
  - (a) 外出の有無
  - (b) 外出習慣・身体能力・補助具/交通手段の有無
  - (c) 外出・在宅時に「気になること」「困ったこと」があったか
  - (d) 外出・在宅をどう「評価」したか



2月5日の行事

外出習慣  
身体能力  
補助・支援  
予算・時間



外出の有無  
困ったこと

量

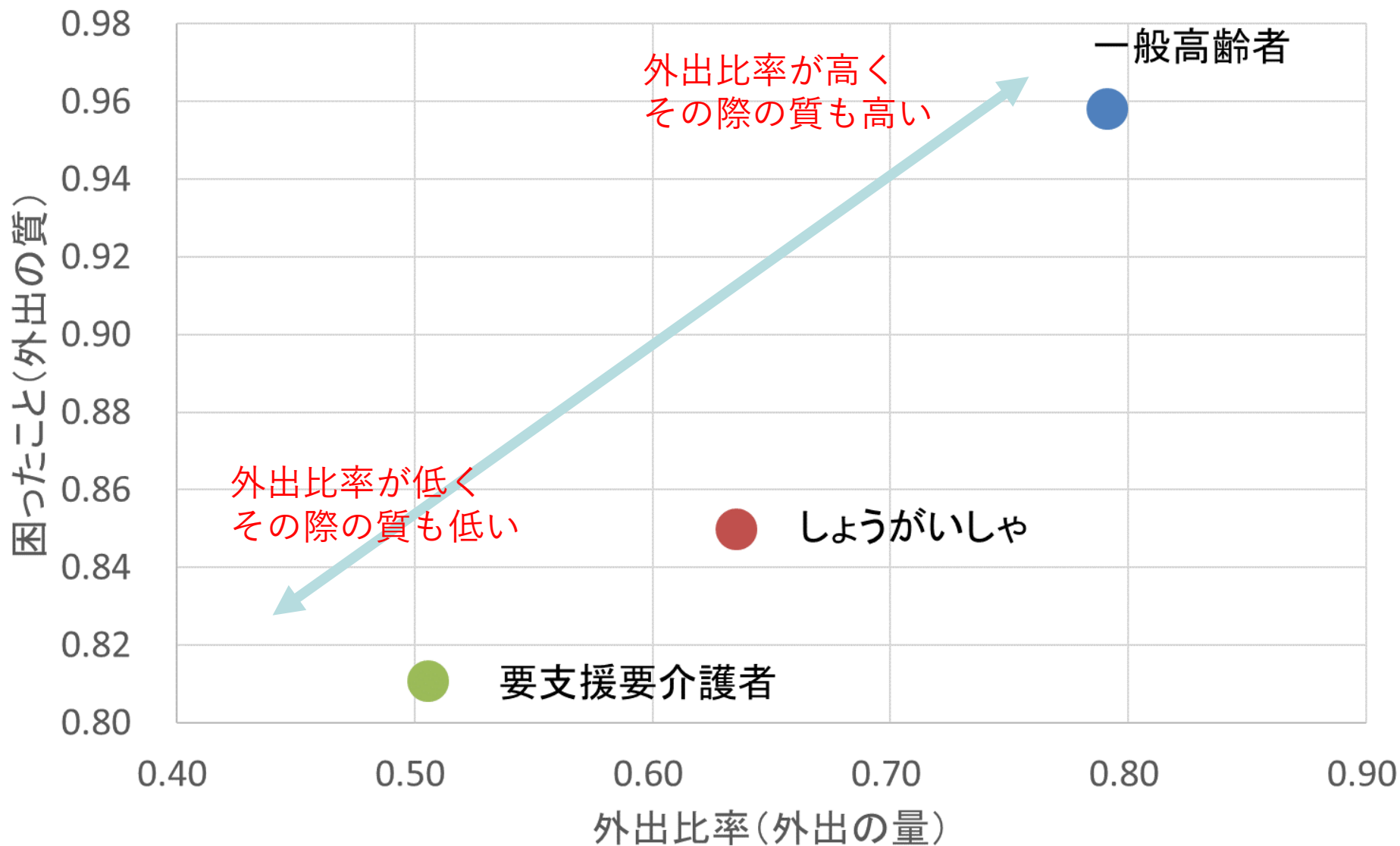
質



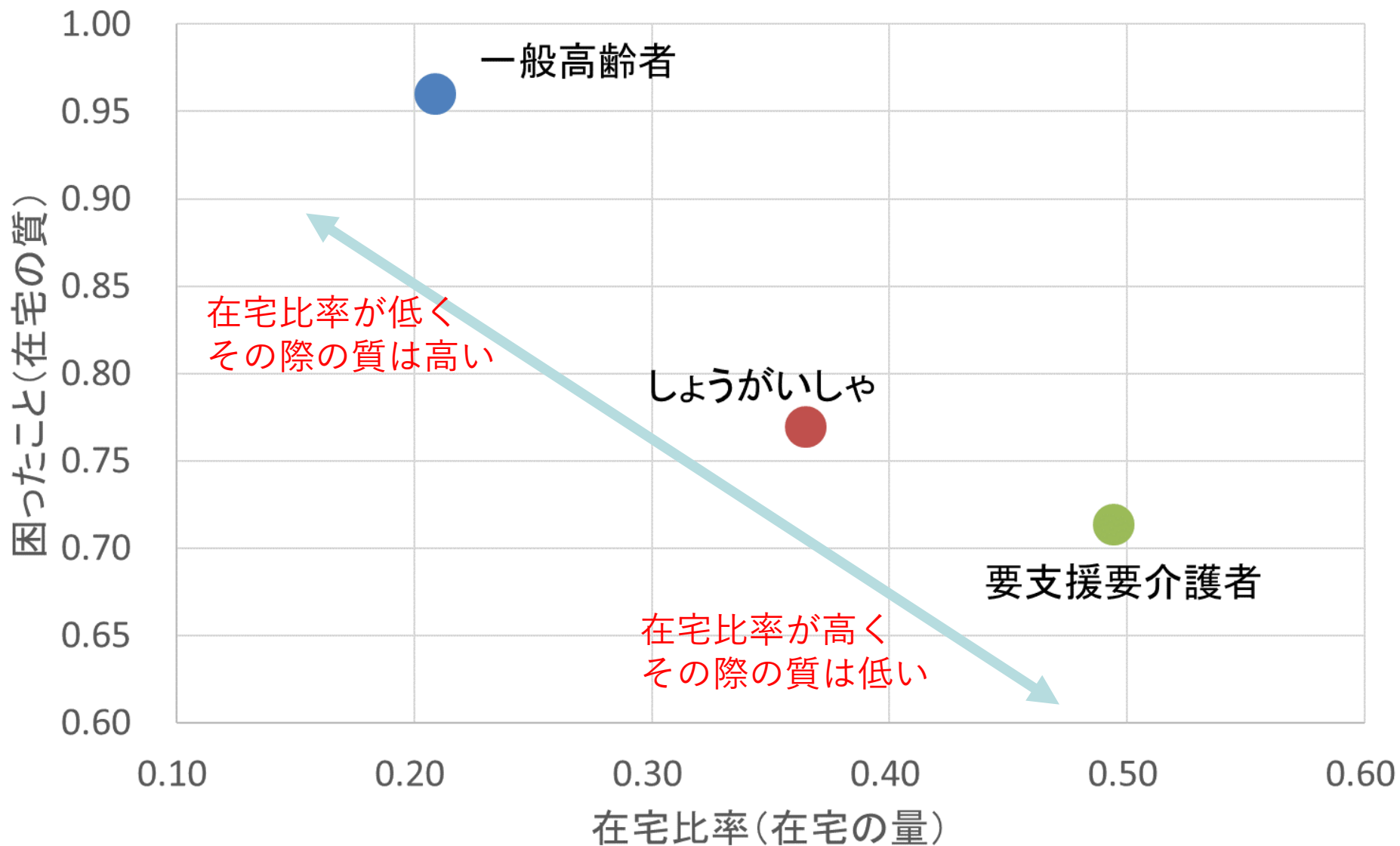
評価



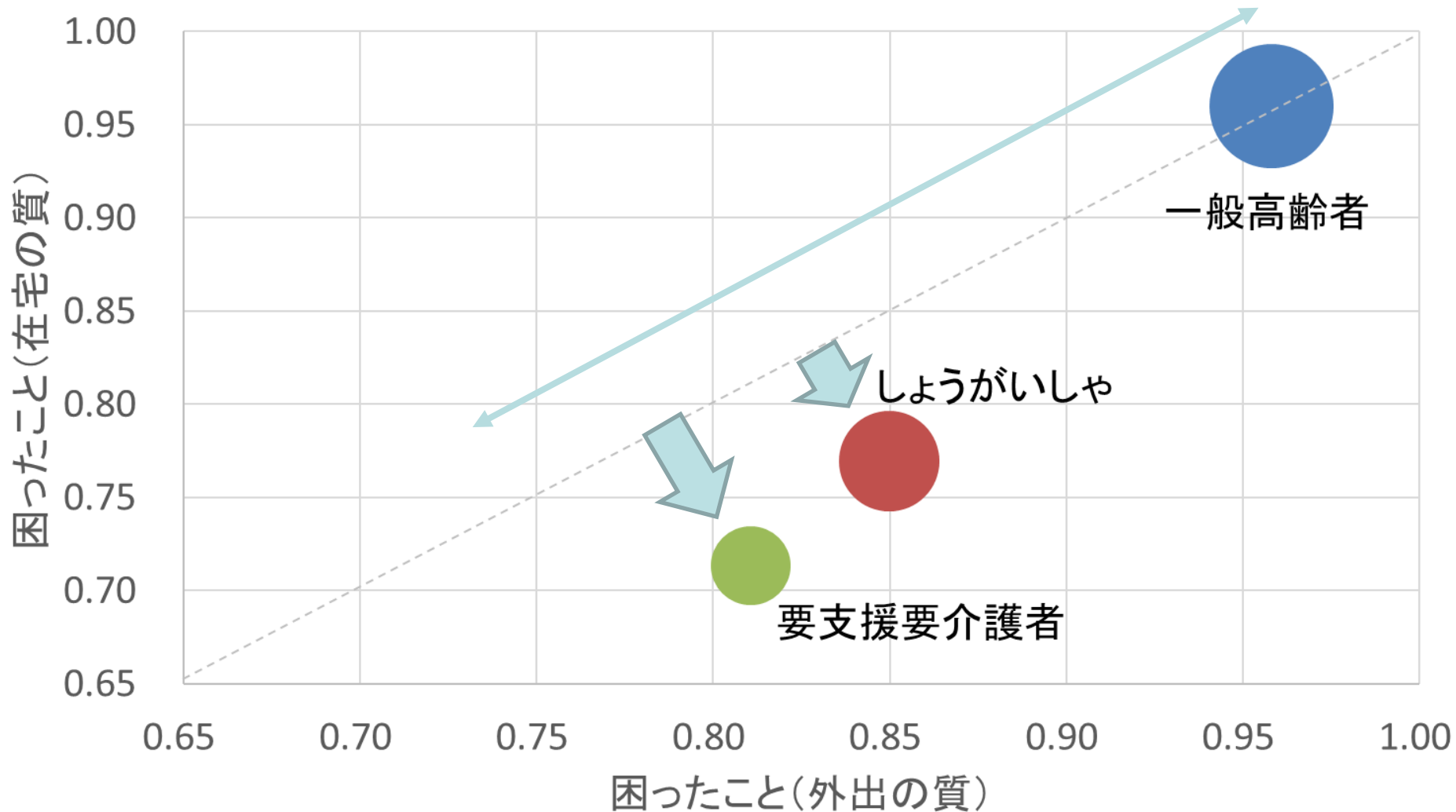
### 3グループの平均的な外出量と質



### 3グループの平均的な在宅の量と質



# 平均的な外出と在宅の質 (円の大きさ=外出比率)



# 3つのグループの特徴

- 一般高齢者
  - 外出の質と在宅の質が、それほど大きく変わらない
- 障がい者・要支援要介護者
  - 外出の質と比較して、在宅の質が上がらない可能性がある。
  - とくに要支援要介護者に顕著な可能性

# 困ったこと



## 環境バリア（要因）

\*実際の質問項目をあとで分類し直しています。

- (1) **段差**（階段、車の乗り降り；畳のへりやしきいなど）で困った。
- (2) **設備**（エスカレーターやエレベーター；エアコンストーブなど）で困った
- (3) 人や物とぶつかった・ぶつかりそうになった[**混雑**]
- (4) 手荷物（道具や器具）などが**重かった**・**かさばった**  
[**携行品**]
- (8) **トイレ**を利用しづらかった
- (9) おいしく**食事**をとりづらかった
- (15) 車椅子で移動する**スペース**が十分になかった



## 対人バリア（要因）

\*実際の質問項目をあとで分類し直しています。

- (6) 大事な**情報**の案内や**説明**がわかりづらかった
- (10) 人に言葉が**伝わりづらかった**・音や人の話が**聞きづらかった**
- (11) 人の**まなざし**やふるまい、ことばづかいが  
気にかかった
- (12) 周囲の人（家族や介助者含む）の理解や**手助け**  
がなかなか得られなかった



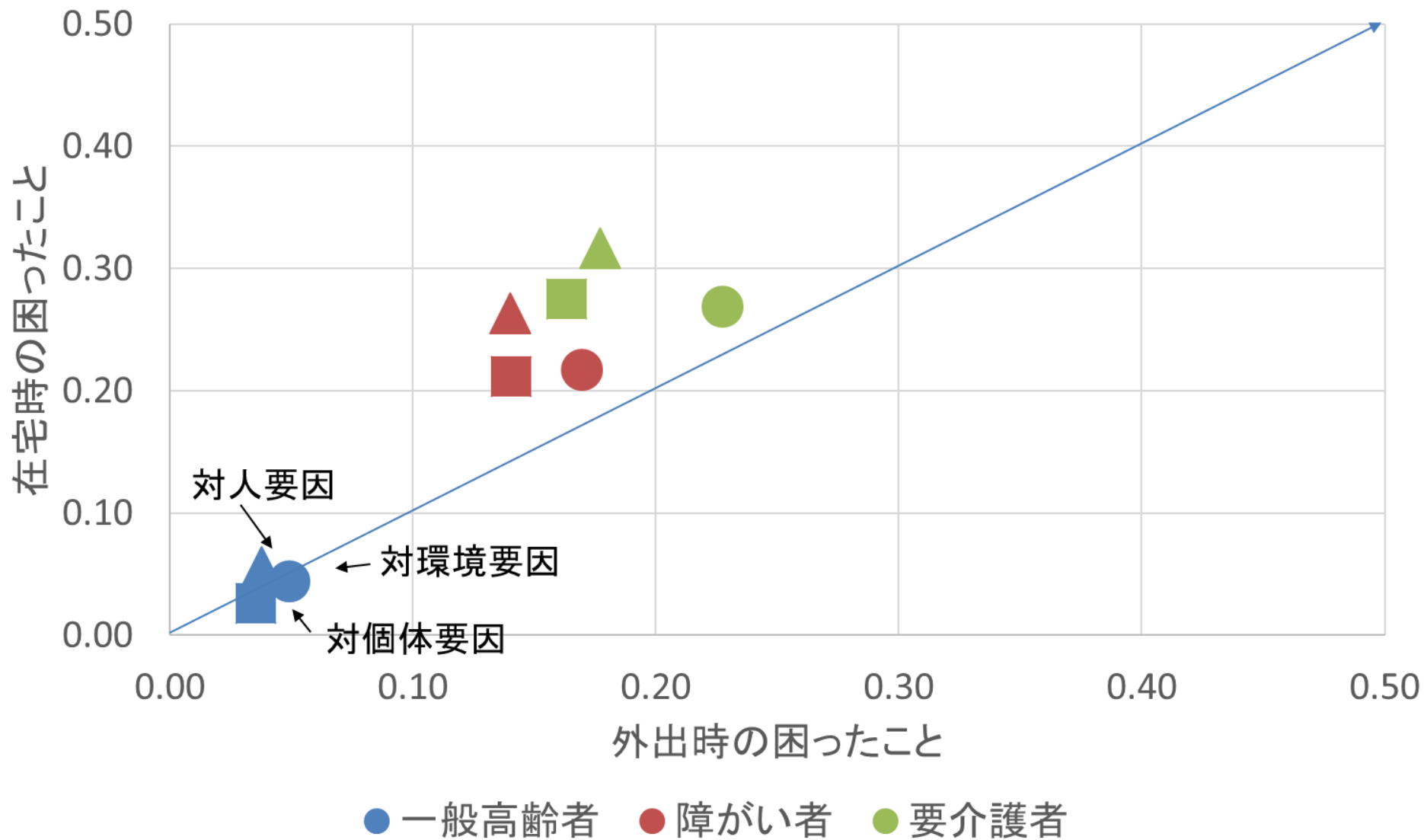
## 個体バリア（要因）

\*実際の質問項目をあとで分類し直しています。

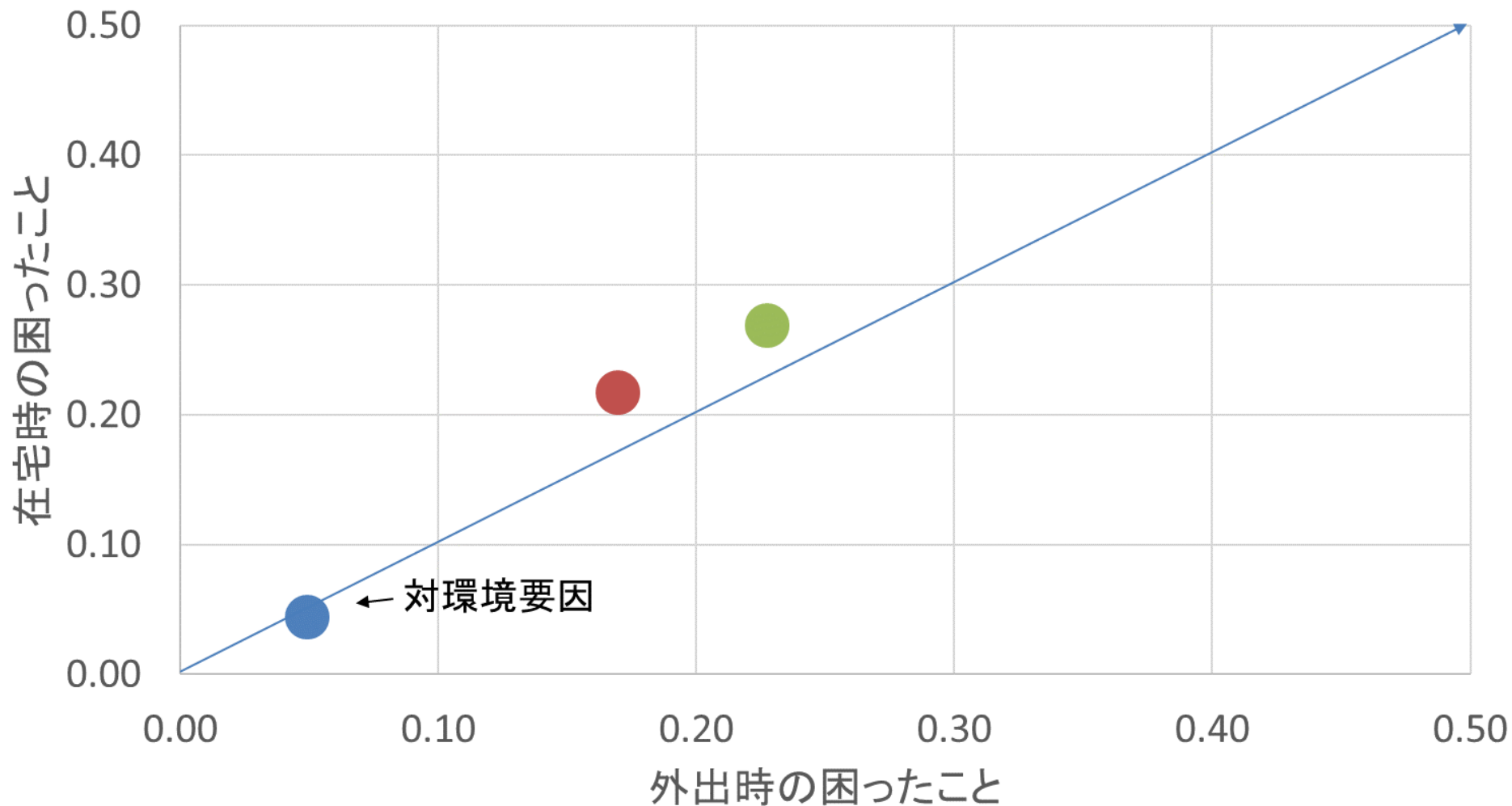
- (5) 大事なものを失くした・失くしそうになった[紛失]
- (7) 不意に気分が悪くなったり、急な疲れがでて、  
落ち着いて休みづらかった
- (13) よけいな出費をしてしまった
- (14) よけいな時間をつかってしまった[時間浪費]
- (16) 自分のこころやからだの調整が難しかった[心身調整]



## 外出・在宅の質

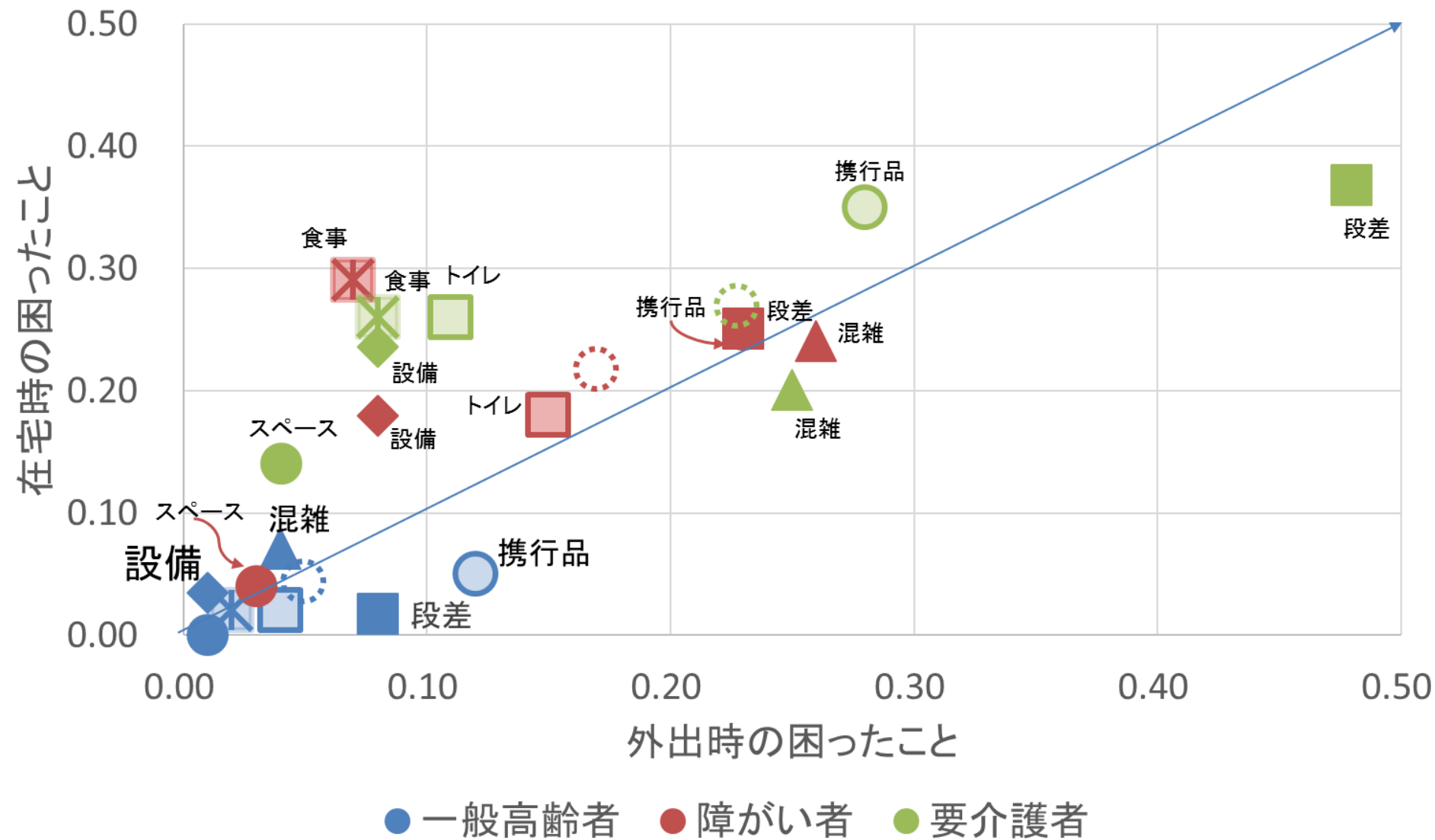


## 外出・在宅の質

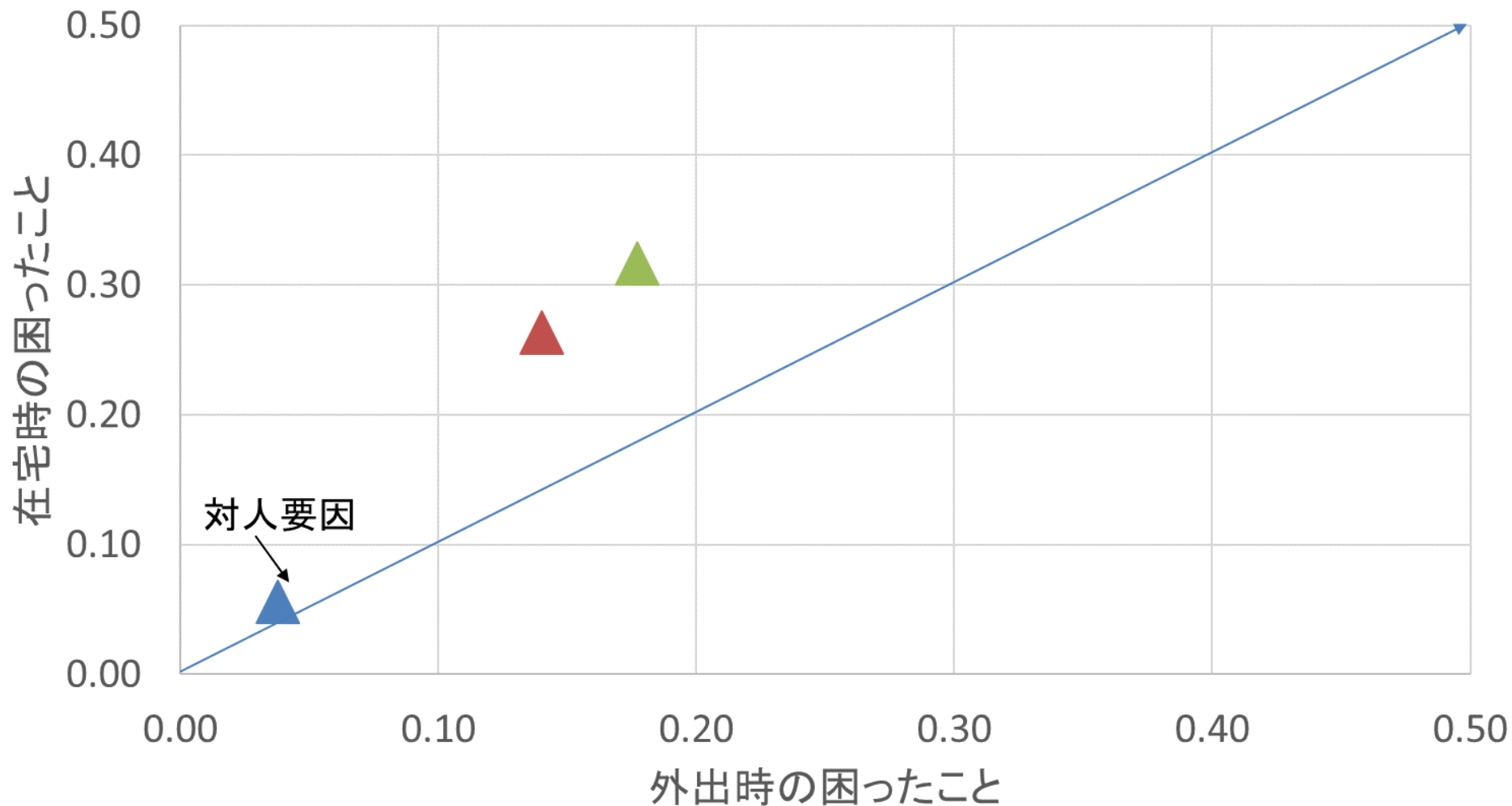


● 一般高齢者 ● 障がい者 ● 要介護者

## 外出・在宅の質(対環境要因)

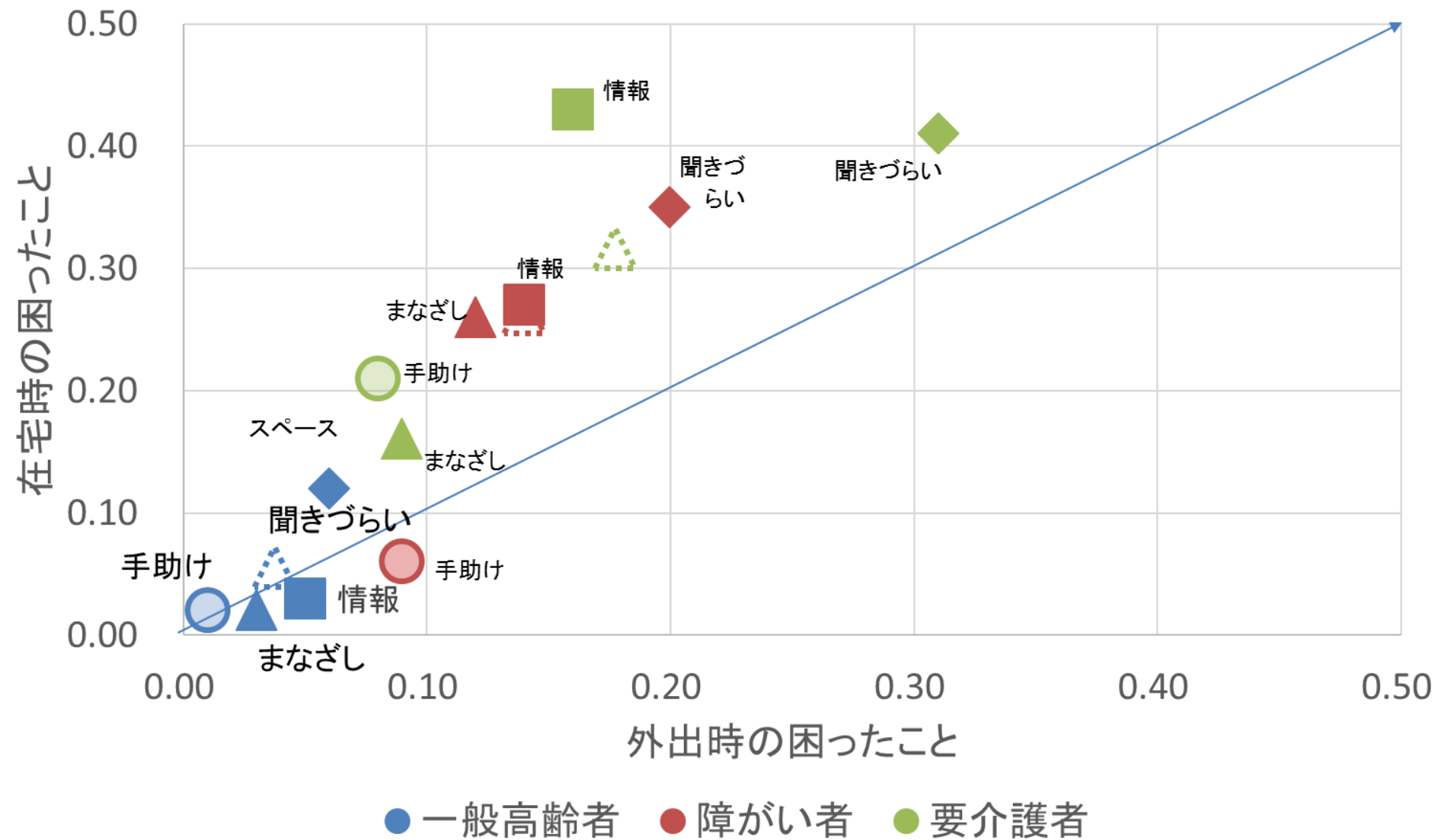


## 外出・在宅の質

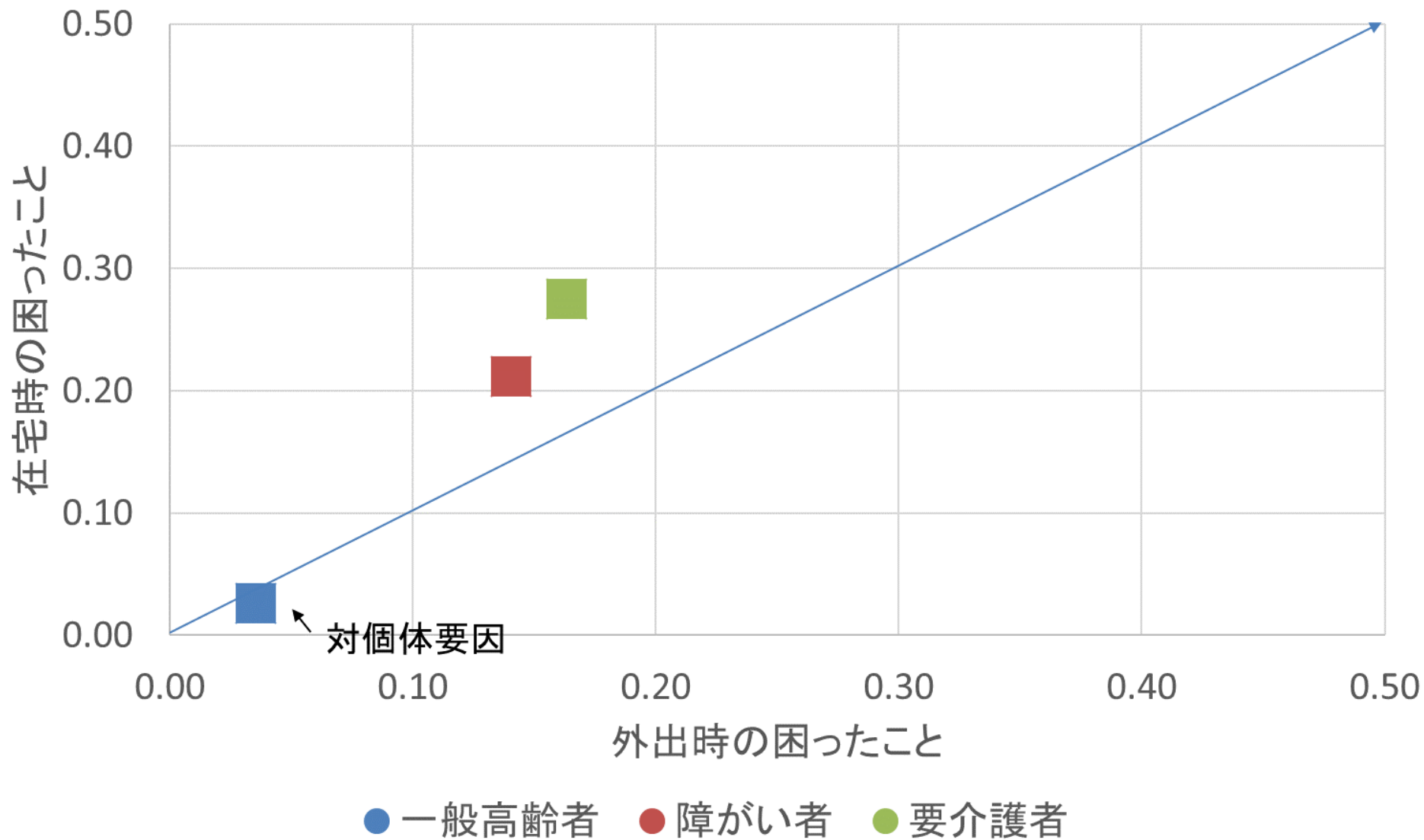


● 一般高齢者 ● 障がい者 ● 要介護者

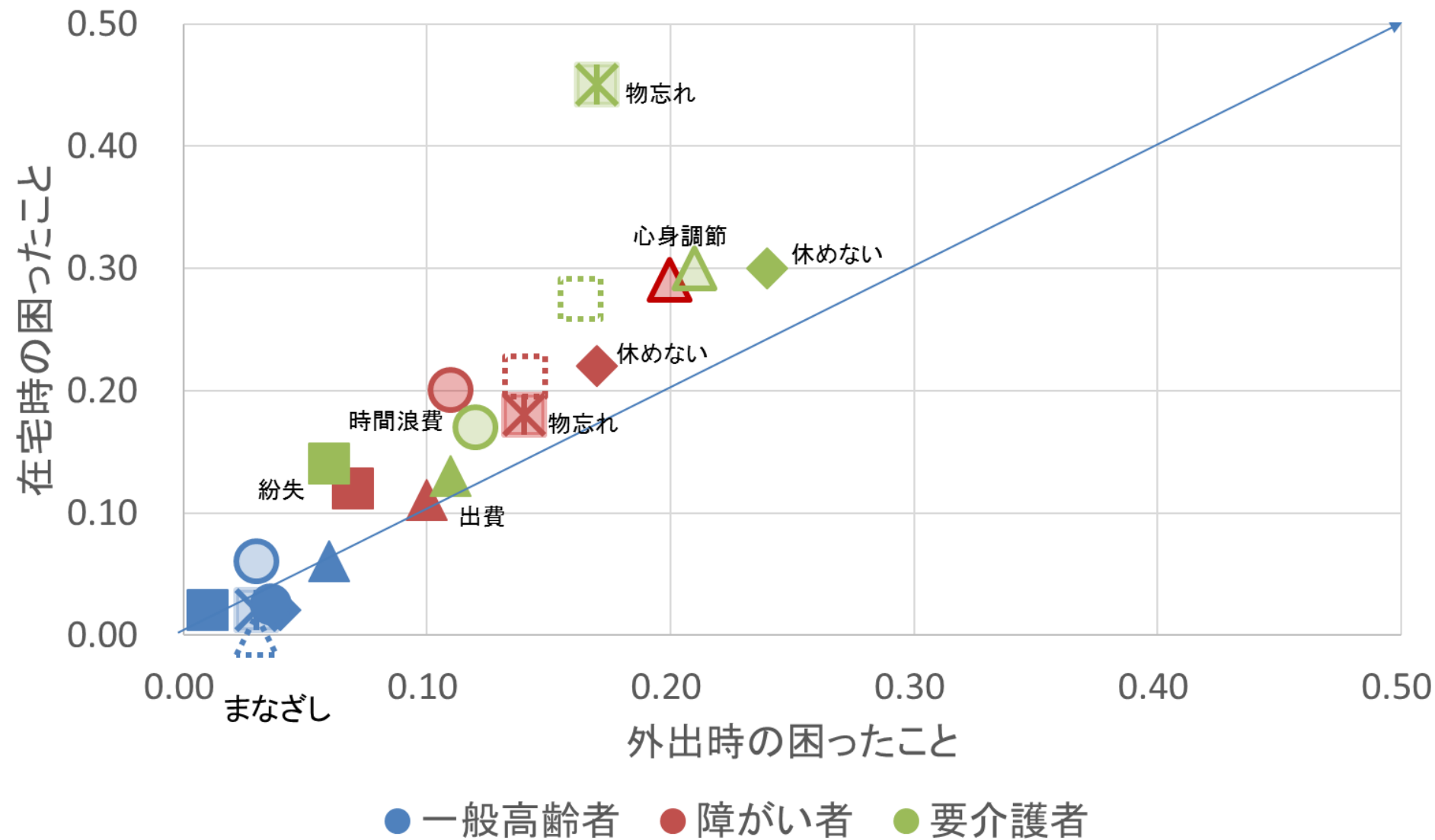
## 外出・在宅の質(対人要因)



## 外出・在宅の質



## 外出・在宅の質(対個体要因)





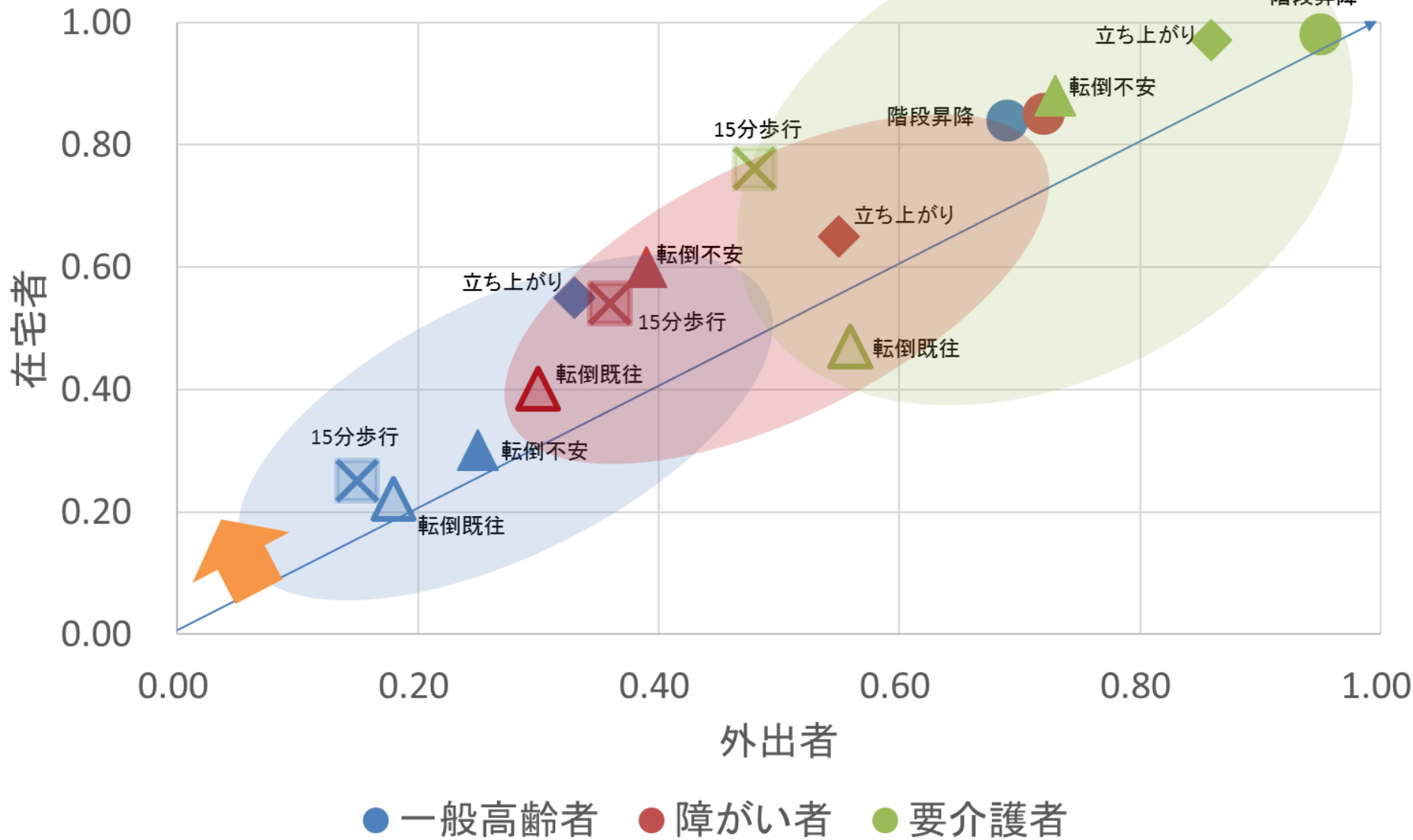
# 外出・在宅の質

- 対環境要因、対人要因、対個体要因の3つのバリアで計測してみた。
  - 全体として、困ったことが起こる頻度は、要支援要介護者 > しょうがいしゃ > 一般高齢者
  - 在宅時と外出時で違いが出るのは、要支援要介護者としょうがいしゃ
    - いくつかの要因については、外出時というよりはむしろ在宅時に困ることが多い。

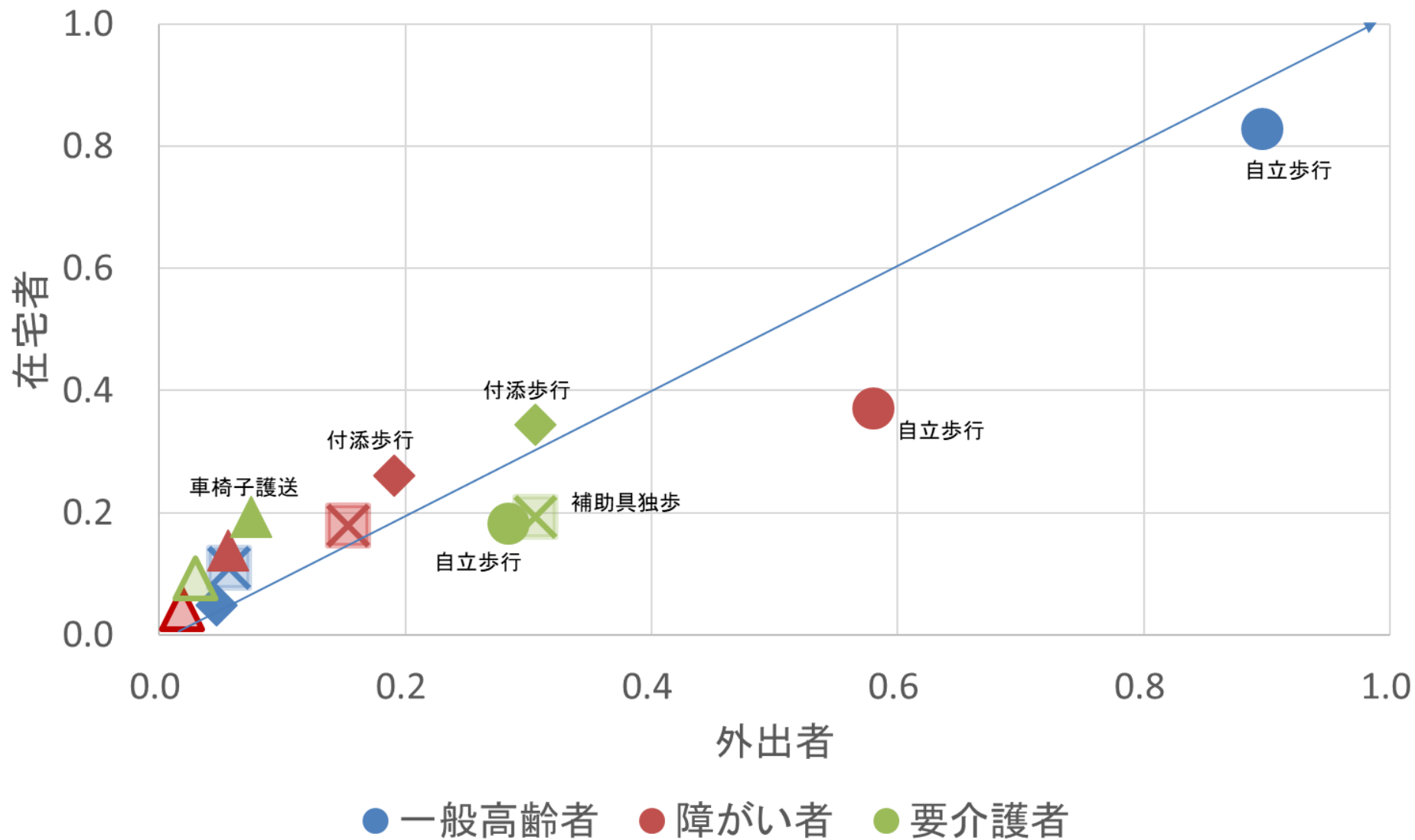
# 移動能力

- 本調査では2つの質問群で移動能力を評価しています。
- (1) 「国立市 健康自立度に関するアンケート」の5つの質問（階段昇降・立ち上がり・15分歩行・転倒既往・転倒不安）から身体移動能力を、
- (2) ふだん移動の際に使っている補助具・付添の有無（単独歩行・補助具歩行・付添歩行・単独車椅子・付添車椅子）から運動機能の制限度合い（支援付移動能力）を、推測しています。

# 身体上問題が有る割合 (Q25)



## 補助具・付き添いの有無からみた、ふだんの移動能力



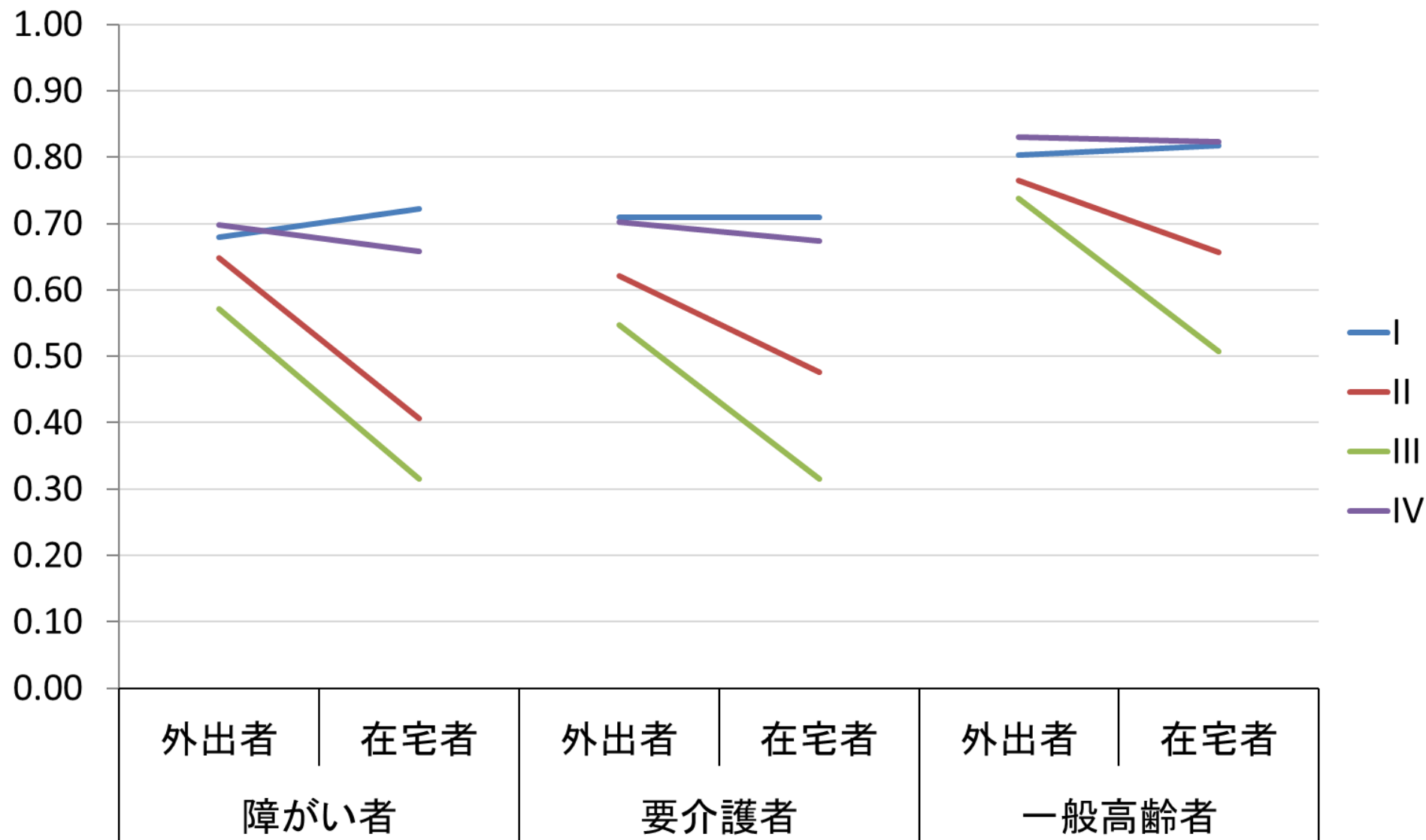
# 4つの評価軸

- I群（安心）
- II群（目的実現・健康）
- III群（交流・刺激）
- IV群（自分らしい感じ）

外出したことの感想をお聞かせください。(各項目ひとつずつに○)

|                               | よくあつはまる | まああつはまる | あつはまるな |
|-------------------------------|---------|---------|--------|
| (1) おおむね安心してくつろいでいられた         | I       |         |        |
| (2) ふだんの自分らしい感じでいられた          | IV      |         |        |
| (3) 金銭などの負担が大きすぎなかった          |         |         |        |
| (4) 外出でしたかったことが実現できた          | II      |         |        |
| (9) 身体・精神などの健康に良い感じがした        |         |         |        |
| (10) 自分でコントロールしている感覚を保てた      |         |         |        |
| (7) 経験や視野を広げる適度な刺激があった        |         |         |        |
| (8) 予期せぬ出会いや発見があった(人・景色・飾りなど) | III     |         |        |
| (6) 気晴らしができた・楽しんだ・笑った         |         |         |        |
| (5) 周囲の人と会話や交流ができた            |         |         |        |

## 4つの評価軸と外出・在宅





## (支援付) 移動能力と評価の関係

- 移動能力（身体運動機能・支援付移動能力ともに）の高さは、外出＞在宅の順、要支援要介護＞障がい＞一般高齢の順でした。
- 4つの評価軸のうち、移動能力と同様の順番は、II群とIII群のみに当てはまり、I群とIV群については当てはまりません。

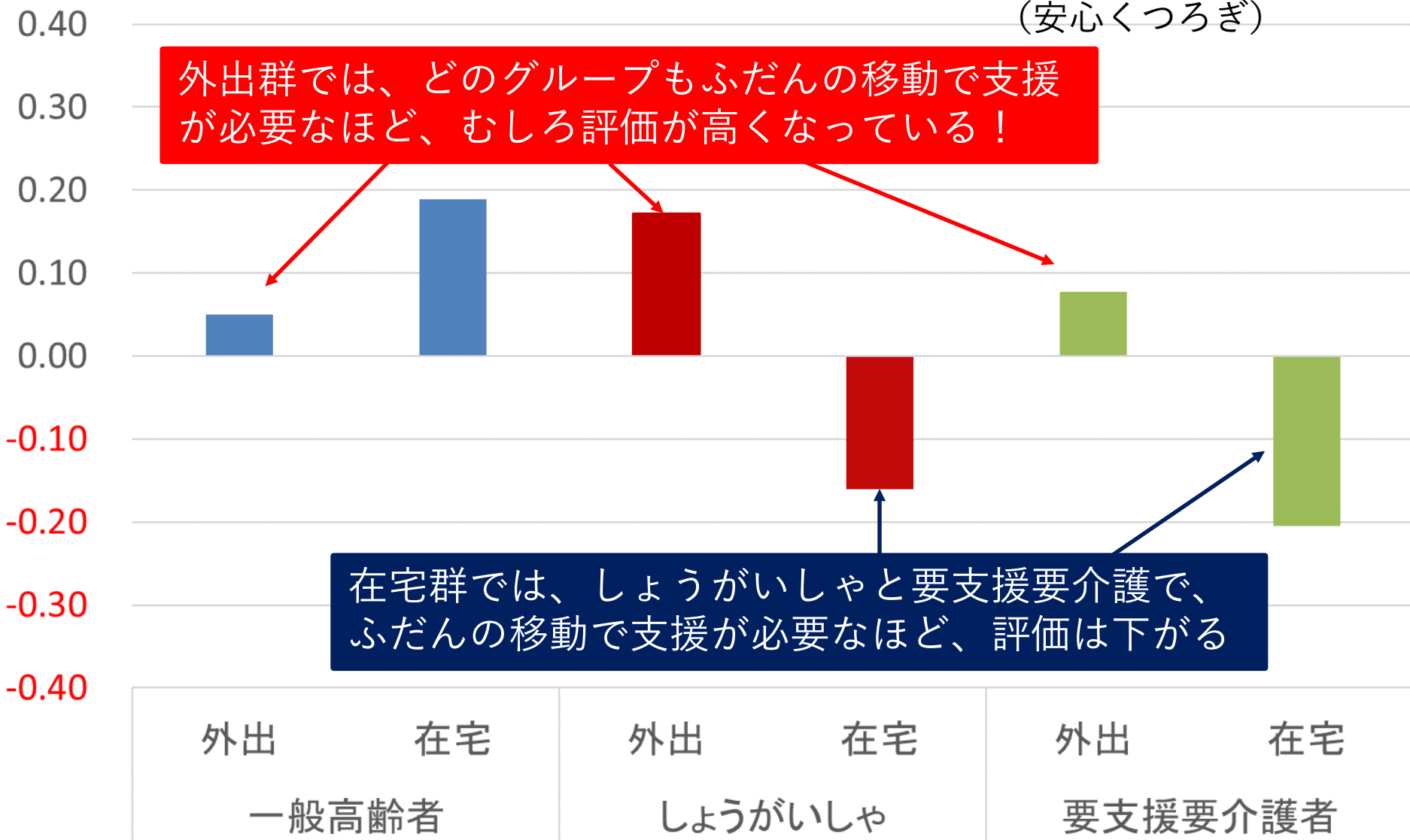
- 最後に、支援付移動能力（単独歩行・補助具歩行・付添歩行・単独車椅子・付添車椅子）と評価の関係を見てみます。

## ふだんの(支援付)移動能力と評価I群の関係

(安心くつろぎ)

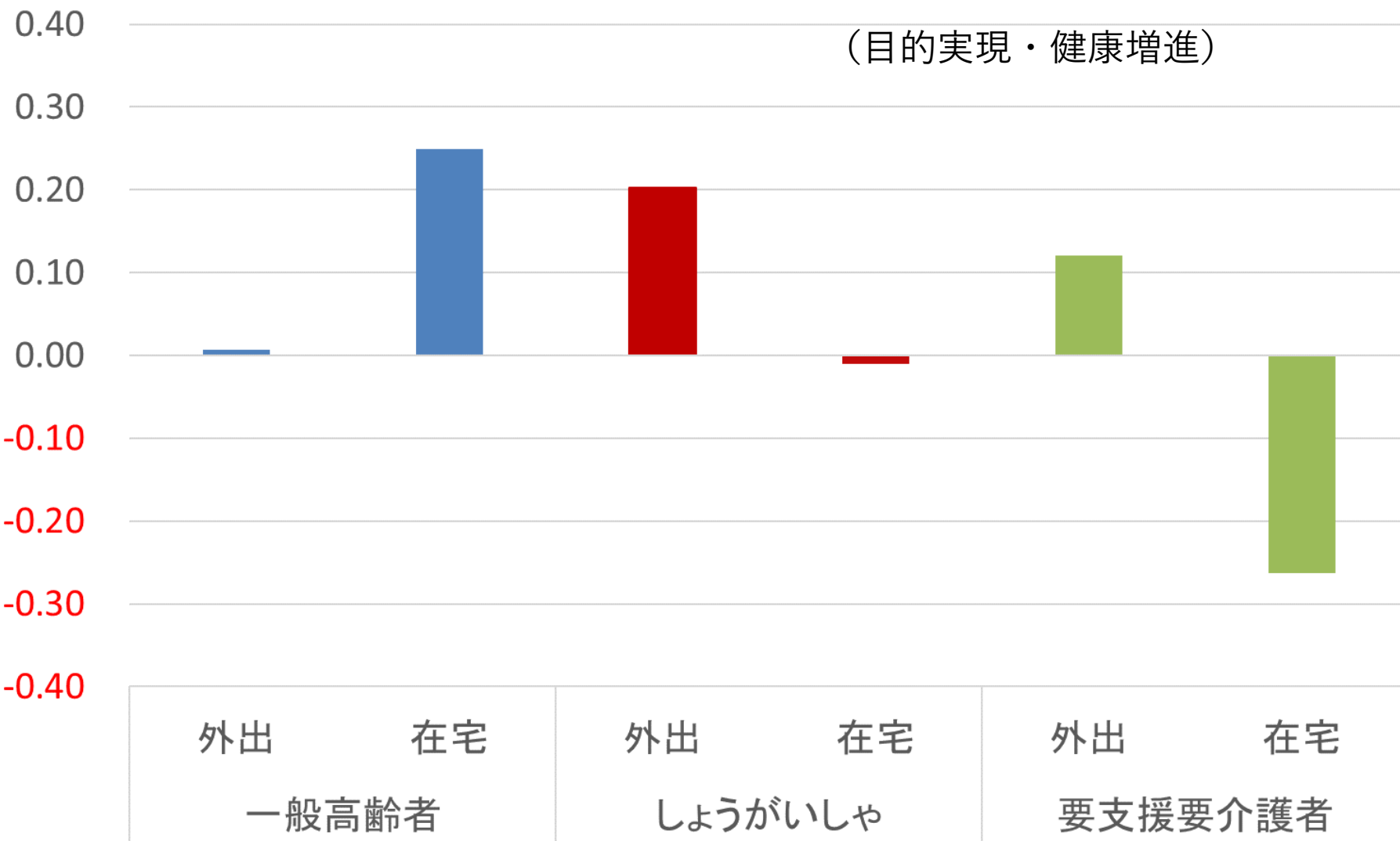
外出群では、どのグループもふだんの移動で支援が必要なほど、むしろ評価が高くなっている！

在宅群では、しょうがいしゃと要支援要介護で、ふだんの移動で支援が必要なほど、評価は下がる



## ふだんの(支援付)移動能力と評価II群の関係

(目的実現・健康増進)



## まとめ：データが語ること I

- どの評価軸でも、一般高齢者 > しょうがいしゃ = 要支援要介護者の順である。ただし、
- I群（安心）とIV群（自分らしい感じ）では  
外出 = 在宅である一方、  
II群（目的実現・健康）とIII群（交流・刺激）では **外出 > 在宅**。
- 外出することのメリットがうかがえます。

# まとめ：データが語ることⅡ

- 障がい者・要支援要介護者の場合、支援付移動能力が下がっても、
- 外出群では、評価は下がりにくい。
- 在宅群では、大きく評価が下がりやすい。
  
- 外出時にはあらかじめ補助具を用意したり、付添をお願いできているが、在室時にはそれができていないからなのかもしれません。

# 結び

- 一般高齢グループと他のグループ（要支援 要介護・障がい）間の大きな違いは、次の点にありそうです。
- 一般高齢グループはたとえ移動能力に制約がでてきても、在宅を選択することによって、困難を回避し、高い評価を維持できているようです。
- 他のグループはそれができにくい状況にあります。



- 問題はこの先です。一般高齢グループにおいても、健康に良いといった評価は、在宅群よりも外出群の方が高く出ました。
- 移動能力の制約にともない、外出を控えつづけるとしたら、ますます移動能力の制約を招きかねません。

- 外に出る／家でくつろぐ、どちらも気がねなく選べるようにしたうえで、さあ、お選びください！と言えるようにするためにはどうしたらよいか、が初めの問いでした。
- そのためには、個人の状況に見合ったさまざまな外出手段を考案すること。その必要性や効果を図る際に、個人の在宅の質への考慮を怠らないことこれが暫定的な結論です。

# 今後の予定

5年間パネル調査のお願い

一般高齢者、障がい者、要介護者を比較すると、この順番で、外出比率が高く、移動能力が高く、外出・在宅の質も高いという傾向がみられます。

しかし、彼らは異なる個人ですので、単純に比較することはできません。同じ個人が、移動能力が変わったときにどれだけ外出の量が変わるのか、外出の質が変わるのかを示す必要があります。

そのためには、同じ個人を追跡するパネル調査が必要となります。ご回答いただいたみなさまに深く感謝いたしますとともに、さらなるご協力をお願い申し上げます。